

## 第2 外国語としての韓国語学習に関する意識調査

——島根大学の事例分析——

朴 瑞庚・林 河運

### 1. はじめに

日本では2000年以降に、韓国と韓国語<sup>1</sup>に関する一般の関心が高まってきた。その背景には2002年の大学入試センター試験への韓国語の追加と日韓ワールドカップの共同開催や、いわゆるK-POPや韓国ドラマに象徴される韓流ブームがあった。これらがきっかけとなり韓国語教育へも注目が集まることで、韓国語を学ぶ学習者の数はますます増えることとなった。

日本における韓国語教育は在日韓国・朝鮮人、社会人、韓国への留学を目指す学生など、多様な学習者を対象として行われている。本稿では主に日本の大学における第2外国語としての韓国語教育に焦点を当てたい。

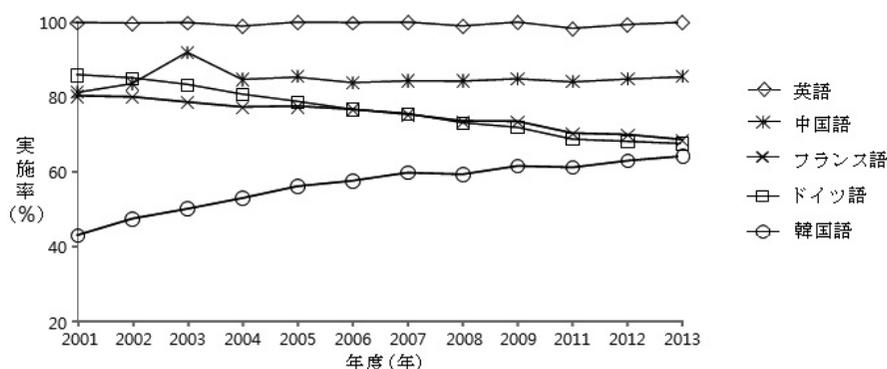


図1. 日本の四年制大学における外国語教育の実施概況

図1は四年制大学において上位を占める5つの外国語教育の実施概況<sup>2</sup>である。図1を見ると、韓国語は他の外国語と比べて実施率（実施校数/全学校数）は低いものの、ここ数年間で20%程度の上昇が見られ、日本の大学において第2外国語として定着しつつあると言える。しかし、このような実施率の上昇とは裏腹に、最近の歴史問題や領土問題などをめぐる日韓関係の悪化の影響で2013年以降からは学習者の数が年々減少する傾向にあることが報告されている（오고시 2015; 오기노 2015 など）。島根大学においても2013年をピークに増加が止まり、2014年にはその大幅な減少が見られ<sup>3</sup>、2016年現在まで再び増加するこ

<sup>1</sup> 朝鮮半島の南の大韓民国では「韓国語」、北の朝鮮民主主義人民共和国では「朝鮮語」と名称が異なるが、両者は言語的に同一のものである。本稿では「韓国語」という呼称に統一する。

<sup>2</sup> 文部科学省による「大学における教育内容等の改革状況について」を基に作成した。

([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/005.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/005.htm))

<sup>3</sup> 2013年（364名）と2014年（286名）である。

となく横ばいである。学習者の選択する外国語が時代の流れや個人の好みによって大きく影響されることが端的に現れていることが分かる。このような状況は日本の大学において韓国語教育がどのように行われるべきであるかという問題に影を落としている。

一方で、学習者にどのような学習環境を与えるべきかについて様々な観点から提案がなされている。例えば、타니자키 (2012) は日本の大学で韓国語を学んでいる学習者を対象としてアンケート調査を実施し、韓国文化と関連づけて考察した。その中で、学習意欲があっても文法と発音など、学習内容に困難を感じることで学習到達度にも悪い影響を与えると述べ、言語学習における挫折感を文化教育で補うことを提案した。오고시 (2015) は授業時間と学習者の能力を考慮した上で、今後は今まで教えてきた学習内容をどのように減らすべきかを考える必要があると述べた。しかし、文化教育を導入することや既存の学習内容を縮小することは、慢性的な時間不足に喘いでいる韓国語教育の現状を考えると更なる学力低下につながる可能性があると思われる。また、これらの提案は授業だけに焦点を当てているが、授業の中で重点を置いて教える内容と何らかの形で授業外でも学習を支援するという両方からなる学習環境の提供も一つの方法として考えられる。そこで本研究では、授業外で学習を支援することを視野に入れつつ授業改善に向けて知見を得ることを目的とし、様々な側面から韓国語学習に対する学習者の意識の実態について検討と考察を行う。本研究で得られたデータは今後、学習者の多様な要求に対する理解を深め、それに応じて学習環境を整えるなど、韓国語教育の質的向上に向けて有益な視点を提供することが期待される。

## 2. 調査の概要

### 2.1. 調査対象

島根大学における韓国語科目は、学習期間1年で前期の「韓国・朝鮮語 I」と後期の「韓国・朝鮮語 II」が開設されている<sup>4</sup>。本調査の対象は全員「韓国・朝鮮語 I」の単位既修者であり、その後、「韓国・朝鮮語 II」を引き続き履修している学習者<sup>5</sup>と、「韓国・朝鮮語 II」の単位取得後に「教養育成科目」として「国際文化情報 D (韓国・朝鮮語圏)」を履修している学習者<sup>6</sup>である。学習者の平均年齢は 19.4 歳 (SD: 0.8)、母語は全員日本語である。詳細は表 1 を参照されたい。

<sup>4</sup> 前期 (1 コマ 90 分の授業を週 2 回、計 30 回実施) と後期 (2 科目に対して科目ごとに 1 コマ 90 分の授業を週 1 回ずつ、計 30 回実施) である。「韓国・朝鮮語 I」は統一テキストを使って韓国語の基礎を教えている。「韓国・朝鮮語 II」は「総合」、「検定対策」、「話す」、「聞く」、「文法」、「読む・書く」の中から 2 科目を選択させ、各科目に特化した内容を自主制作した教材を使って教えている。

<sup>5</sup> 1 年生 (162 名) の他に、再履修している 2 年生 (5 名)、3 年生 (3 名)、4 年生 (4 名) を含む。

<sup>6</sup> 2 年生 (5 名) と 3 年生 (3 名) である。

表 1. 学習者の詳細

区分		n	%
性別	男性	90	49.5
	女性	92	50.5
専攻	文系	108	59.3
	理系	74	40.7
大学入学前の学習歴	ある	4	2.2
	具体的な学習方法		
	独学	3	1.6
	公開講座	1	0.5
	ない	178	97.8

## 2.2. 調査項目

本調査では質問紙を作成して用いた。質問紙は2部構成になっている。まず、韓国・韓国人に関する質問である。韓国語を履修している学習者に対する理解を深めるため、学習者が韓国・韓国人のどのような点に注目し、どのようなイメージを持っているのかを調べた。具体的な質問内容は以下の通りである。

- (1) 韓国・韓国人に対して関心があるのか、ある場合はどのような点に関心があるのか。
- (2) 韓国・韓国人に対してどのようなイメージを持っているのか。

次は、韓国語学習に関する質問である。学習者には多様な側面から韓国語学習にどのように取り組んでいるのかを尋ねた。具体的な質問内容は以下の通りである。

- (3) 第2外国語として韓国語を選んだ理由は何か。
- (4) どのような韓国語能力を身につけたいのか。
- (5) 韓国語の学習後、どのように韓国語を役立てたいのか。
- (6) 韓国語学習で難しいこと、苦手なことは何か。
- (7) 授業で足りないと思うこと、補ってほしいことは何か。
- (8) 授業とその予習・復習以外に韓国・韓国語を学ぶ機会があればどのような内容を学びたいのか。
- (9) 単位取得後も機会があれば韓国語学習を続けたいのか。

なお、学習者には質問の内容に応じて選択形式か自由記述形式で回答してもらった<sup>7</sup>。

## 2.3. 調査手順と分析

質問紙は2016年10月末に配布し、2016年11月初めまでに回収した。調査者は質問紙<sup>7</sup>選択形式(4, 9)、自由記述形式(2, 3, 5, 6, 7, 8)、選択形式と自由記述形式の混用(1)である。

を学習者に直接配布し、授業後もしくは後日持参するように指示した。回収率は96.3%である。

収集したデータの処理については、まず選択形式の回答の各選択肢における回答率を求め、次に自由記述形式の回答では、キーワードを中心にして範疇別に整理し、質的分析を試みた。

### 3. 結果および考察

#### 3.1. 韓国・韓国人に対する関心とイメージ

前項の1ではここ最近日韓関係の悪化で、大学で韓国語を学ぶ学習者の数が減少していることに触れた。しかし、時代の流れに相反し、本調査に参加した学習者のように韓国語を選択して学習する者もいるのも事実である。それでは、これらの学習者を支えている韓国・韓国人と関連する要素にはどのようなものがあるのであろうか。その手がかりを得るために、本調査では学習者が韓国・韓国人に対してどのような点に関心を持ち、また学習者に韓国・韓国人がどのようなイメージで理解されているのかを調べた。

表2は「韓国・韓国人に対して関心があるのか、ある場合はどのような点に関心があるのか」の設問に対する回答結果で、49.5%の学習者が「関心がある」と答えている。「関心がある」と答えた学習者の関心事を詳しく調べてみると、大半がK-POP、韓国ドラマ、韓国料理など、いわゆる韓流と関連するものである。この結果から、2000年代以降に広まった韓流ブームはその勢いを弱めているものの、依然として学習者の関心を引くコンテンツになっていることが分かる。

表2. 韓国・韓国人に対する関心 (n=182)

区分	n	%
関心がある	90	49.5
具体的な関心事 (複数回答)		
K-POP、韓国ドラマ	42	23.1
食べ物	32	17.6
文化全般	17	9.3
旅行、観光地	7	3.8
美容	6	3.3
歴史	5	2.7
その他 <sup>8</sup>	25	13.7
どちらとも言えない	77	42.3
関心がない	15	8.2

表3は「韓国・韓国人に対してどのようなイメージを持っているのか」の設問に対する回答結果である。まず、多くの学習者が回答した項目に絞れば、食べ物や韓国人の外見など、直接観察可能でマスメディアを通じて接していると推測される要素によって韓国・韓

<sup>8</sup> 「その他」には「韓国の慣習」、「韓国人の国民性」、「日本人とは異なる人柄」などがあつた。

国人に対するイメージが形成されていることが分かる。次に、学習者の回答で特徴的であったのは、「日本人に対して友好的なイメージ」と「日本人のことを嫌っている人が多そう」という意見の対立であり、韓国・韓国人に対して肯定的なイメージと否定的なイメージが混在している点である。これは、学習者個人に与えられてきた情報の質や量的な差によるものと思われるが、過剰な一般化による先入観や偏見を解消するためには、学習者に韓国・韓国人について様々な視点から学んでいくことの重要性を理解させる必要があると考えられる。

表3. 韓国・韓国人に対するイメージ (n = 182, 複数回答)

区分	n	%
辛いものが好き、食べ物がおいしい	107	58.8
美男美女が多い、オシャレ、肌がきれい	83	45.6
K-POP、韓国ドラマ、アイドル	56	30.8
美意識が高い、整形大国	40	22.0
情に厚い、気さくな人が多い、気が強そう	36	19.8
日本と交流が深い、反日意識がある、領土問題がある	21	11.5
目上の人を敬う、上下関係が厳しい	14	7.7
力強い発音、口調がきつい	11	6.0
IT産業が発達している、物価が安い、サムスン	11	6.0
地理的に日本に近い	11	6.0
教育に力を入れている、学歴社会	10	5.5
旅行に行きやすい	8	4.4
韓国独特の文化がある	7	3.8
伝統衣装、チマチョゴリ	7	3.8
徴兵制度がある	7	3.8
その他 <sup>9</sup>	34	18.7
未回答	2	1.1

### 3.2. 韓国語学習に対する学習者の意識

前項の2.1の表1を見て分かるように、本調査に参加した学習者の97.8%は大学入学前に韓国語学習の経験が皆無な状況である。この点を考えると、1年間の短い期間ではあるが、大学で充実した韓国語学習を行うことは今後の韓国語学習の基礎を築くという点で非常に重要である。そこでここでは、学習環境の改善に向けての知見を得るために、いくつかの視点から韓国語学習に対する学習者の意識の実態について検討する。

表4は「第2外国語として韓国語を選んだ理由は何か」の設問に対する回答結果である。まず、今回の調査で最も多くの学習者が言及したのは「外国語の中で一番使えそうだから」(20.9%)であり、実利的な側面を重視して韓国語を選択する傾向が見られる。次に、表4の結果をDeci & Ryan (1985, 2000)による自己決定理論 (self-determination theory) と関連

<sup>9</sup>「その他」には「頭がいい人が多い」、「記念日を大切にする」、「田舎から都会に出る人がたくさんいる」などがあつた。

づけて分析してみる。自己決定理論では、行動の意志が欠けている状態を指す無動機の他に、内発的動機づけと外発的動機づけを想定している。内発的動機づけは真の興味や楽しさに動機づけられている状態であり、外発的動機づけは目的や報酬を予測することで行動するものである。これらの観点から見ると、今回の調査では韓国語を選択する時点において楽しさなどに動機づけられている学習者もいたが、「使う機会が一番多いと思ったから」、「旅行した時役に立つから」などの例で見られるように外発的動機づけが優勢な状態にいる学習者が多かった。外発的動機づけが強い学習者の場合、学習が進むにつれて動機づけの減退を経験することが報告されている（大岩 2008）。そこで、このような学習者に対しては、動機づけの減退あるいは無動機への移行が起これないように学習者を支援する環境づくりが必要である。

表 4. 韓国語の選択理由 (n = 182, 複数回答)

区分	n	%
旅行の時など、外国語の中で一番使えそうだから	38	20.9
日本語と似ているから	31	17.0
K-POP、韓国ドラマの影響のため	25	13.7
学習しやすいと聞いたから	24	13.2
韓国語、韓国文化などに興味があるから	18	9.9
友人や親せきなど、周りの人が韓国・韓国文化に興味を持っているから	16	8.8
楽しそう、面白そうだから	15	8.2
先輩、友人に勧められたから	11	6.0
韓国・韓国語に親近感を感じているから	8	4.4
公共の場で韓国語を目にすることが多くなっているから	6	3.3
国が一番近いから	5	2.7
その他 <sup>10</sup>	10	5.5
未回答	3	1.6

表 5 は「どのような韓国語能力を身につけたいのか」の設問に対する回答結果である。学習者には韓国語能力試験（TOPIK）における級別の認定基準<sup>11</sup>を提示し、自ら考えている学習到達目標に最もふさわしいものを一つ選択させた。表 5 の結果を見ると、より高度な韓国語能力を身につけたいと答えた学習者もいるが、圧倒的多数を占めているのは 1 級程度の能力である。これは、学習者が韓国語学習において専門性よりは意思疎通中心の基礎的な言語の運用能力を身につけることに重点を置いていることを示している。

<sup>10</sup> 「その他」には「テコンドーを 10 年以上やっていたから」、「特にないです」などがあつた。

<sup>11</sup> <http://www.kref.or.jp/examination/topik>

表5. 韓国語の学習到達目標 (n = 182)

	区分	n	%
1級	自己紹介、買い物、飲食店での注文など生活に必要な基礎的な言語を駆使でき、身近な話題の内容を理解、表現できる。	131	72.0
2級	電話やお願い程度の日常生活に必要な言語や、郵便局、銀行などの公共機関での会話ができる。	14	7.7
3級	日常生活を問題なく過ごせ、様々な公共施設の利用や社会的関係を維持するための言語が使用できる。文章語と口語の基本的な特性を区分し理解、使用できる。	26	14.3
4級	ニュースや新聞をある程度理解でき、一般業務に必要な言語が使用できる。よく使われる慣用句や代表的な韓国文化に対する理解を基に社会・文化的な内容の文章を理解、使用できる。	8	4.4
5級	専門分野における研究や業務に必要な言語をある程度理解でき使用できる。	0	0
6級	政治・経済など全般的なテーマにおいて不便なく利用可能であり、ネイティブ程度までではないが自己表現に問題なく話すことが可能である。	3	1.6

表6は「韓国語の学習後、どのように韓国語を役立てたいのか」の設問に対する回答結果である。まず、学習者は2人に1人以上の割合で「旅行に行った時に使いたい」と答えしており、この結果は上記の表4の韓国語を選んだ理由とも相通じるものがある。次に、学習者の回答の中で特徴的であったのは「最低限の会話」、「軽く使える程度」、「簡単なコミュニケーション」のような表現が多数見られた点である。これは、上記の表5において1級程度の韓国語能力を身につけたいと回答した学習者の声と一致する結果と言える。

表6. 韓国語の将来への活用 (n = 182, 複数回答)

区分	n	%	区分	n	%
旅行	107	58.8	留学	6	3.3
韓国人と韓国語で話す	28	15.4	仕事	6	3.3
K-POP、韓国ドラマなどの鑑賞	17	9.3	教養	2	1.1
日常目に入る韓国語を読む	16	8.8	その他 <sup>12</sup>	1	0.5
特にない	8	4.4	未回答	8	4.4

表7は「韓国語学習で難しいこと、苦手なことは何か」の設問に対する回答結果である。まず、表7における回答数の合計は今回調査した自由記述式の回答の中で最も多く、学習者は学習で苦手なことを多岐にわたって具体的に記述していた。これは、学習者自らが学習上の困難を十分認識していることを反映する結果であり、指導する側は学習者が苦手と感じる部分を克服できるように学習支援を行う必要がある。次に、表7の「読む」と関連する学習者の回答の多くは読解ではなく、音読 (oral reading) のことを指していた。この

<sup>12</sup> 「その他」には「架け橋になりたい」があった。

ような音読上の困難を含め、学習者は特に「発音」、「聞く」、「話す」といった音声運用において困難を感じている様子が見受けられる。以下に各項目における学習者の回答例<sup>13</sup>を紹介しておく。

- 日本語にない発音があり、うまく発音することができないこと。
- 活用語尾がつかいこなせない。
- 日常生活で韓国語を使うことがないので、単語やフレーズを覚えられない。
- 連音化されて発音された文章の聞き取り。
- 文字を見たときにずっと読み方が出てこないこと。
- 文章でスペースを空けるところ。
- 質問への応答が難しい。

表 7. 韓国語学習で難しいこと、苦手なこと (n = 182, 複数回答)

区分	発音	文法	暗記	聞く	読む	書く	話す	その他 <sup>14</sup>	未回答
n	127	86	85	63	30	19	8	1	4
%	69.8	47.3	46.7	34.6	16.5	10.4	4.4	0.5	2.2

表 8 は「授業で足りないと思うこと、補ってほしいことは何か」の設問に対する回答結果である。まず、最も多くの学習者が回答したのは「特にない」(16.5%)である。これは、教師が計画に沿って授業を進めていく現在の授業形式の中では、学習者が授業の進行に関与する余地があまりなく、このような状況が回答に幾分反映されているのではないと思われる。次に、表 8 の中で「実用性」に言及した回答例もあったが、全体的に見ても「一般の韓国人と実際の会話を」、「日常的に使えるような」など、実用性を強調する趣旨の答えが目立った。以下は各項目における学習者の回答例である。

- 旅行に行ったときに簡単な韓国語が話せるようになりたい。
- ネイティブの早口の韓国語を聞きたい。
- 発音の違いは分かっているけど、話す意識できなくなるので、発音のてっぺいをしてほしい。
- 韓国の文化についてもっと話してほしい。
- 活用練習をもっとほしい。
- 韓国ドラマが見たい。
- 自分で文を作ること。
- もうちょっと実際に使えることを教えてもらいたいです。
- さくさく進められてついていけないことがある。
- 自主的な感じで復習プリントを出して欲しい。

<sup>13</sup> 学習者の回答例は原文のまま紹介している。

<sup>14</sup> 「その他」には「韓国語を習ったことがないので理解しにくい」があった。

-物語を読むこと。

表 8. 授業で足りないと思うこと (n = 182, 複数回答)

区分	n	%	区分	n	%
特にない	30	16.5	書く	10	5.5
話す	24	13.2	実用性	10	5.5
聞く	23	12.6	進度が速い	9	4.9
発音	17	9.3	復習	6	3.3
文化	14	7.7	読む	4	2.2
文法	11	6.0	その他 <sup>15</sup>	13	7.1
K-POP、韓国ドラマの活用	11	6.0	未回答	57	31.3

表9は「授業とその予習・復習以外に韓国・韓国語を学ぶ機会があればどのような内容を学びたいのか」の設問に対する回答結果である。まず、最も特徴的であったのは文化と関連する回答が多数寄せられた点である。特に、文化を知ることにとどまらず、体験型の学習を望む声が目立った。次に、「その他」には「韓国版のゲーム」、「韓国の建築物」など、予想以上に幅広い分野において学習者個人の好みが大いに反映されている回答が見られた。以下に各項目における学習者の回答例を紹介する。

- 韓国の色々な文化を体験する。
- 歌やpvとか見て歌詞を訳す！（頭に入りやすい！）
- 韓国料理が知りたい！！
- 韓国人のジョーク、旅行などで使う表現を学ぶ。
- 韓国人と実際に会話してみること。
- 学校ではうやむやにされるので戦争のことについて。
- より高度な文法。
- 韓国の私生活（余暇の過ごし方）。
- 韓国と日本の常識の違い。
- 韓国のおすすめスポット。
- 韓国の教育制度について。

<sup>15</sup> 「その他」には「個人的な指導」、「1年間だけじゃなく、2年、3年間やってほしい」などがあった。

表9. 授業外で学んでみたいこと (n = 182, 複数回答)

区分	n	%	区分	n	%
文化全般	67	36.8	日常生活	7	3.8
K-POP、韓国ドラマ	36	19.8	特にない	7	3.8
食文化	30	16.5	一般常識	6	3.3
表現	27	14.8	旅行	5	2.7
会話	23	12.6	社会	5	2.7
歴史	21	11.5	その他	19	10.4
授業の拡張	8	4.4	未回答	30	16.5

表10は「単位取得後も機会があれば韓国語学習を続けたいのか」の設問に対する回答結果である。「どちらとも言えない」(50.0%)と答えた学習者が最も多かったが、「継続する」(42.9%)もほぼ同じ程度である。積極的に韓国語学習を継続するという肯定的な態度が見受けられる。

表10. 韓国語学習継続の有無 (n = 182)

区分	n	%
継続する	78	42.9
どちらとも言えない	91	50.0
継続しない	13	7.1

### 3.3 韓国語教育への示唆

ここでは本調査の分析結果から授業改善のあり方について検討する。韓国・韓国人に対する関心とイメージを調べた結果では、韓国・韓国人に対して肯定的なイメージと否定的なイメージが混在していることを確認しており、韓国・韓国人に対して多様な意見があることに注意しておく必要があることを強調した。韓国語学習に対する意識を調べた結果では、学習者が特に音声運用において困難を感じており、授業では実用性が足りないという趣旨の回答が目立ったことや、授業とその予習・復習以外に文化関連の学習を希望する声が高いことに言及した。より良い学習環境を提供するためにはこれらの学習者の意見を最大限に反映させる必要がある。しかし、既存の授業の限られた時間の中で基礎的なものから応用までの幅広い内容を教え、韓国の社会文化的知識まで学習させるのは現実的に無理があるのも事実である。授業でどれほど多くを教えたのかより、学習者が授業内容をどれだけ理解したのかがより重要であろう。

しかしながら、学習者の授業に対する要求を何らかの形で可能な限り満たすための努力はする必要がある。ここで授業改善の一つの方法として考えられるのがブレンディッドラーニングである。ブレンディッドラーニングは学習形態をブレンドすることであり、「オンライン学習と伝統的学習の融合」や「eラーニングと対面学習の融合」などの言葉で表現されるものである。学生が教室に集まり同時間、同空間に同経験を共有するという伝統的

な学習スタイルとeラーニングを融合させ、両方を相互補完的に用いることでより高い学習効果を上げようとする試みである(宮地 2009)。このような本格的なブレンディッドラーニングの形でなくても、既存の授業形態に加え、何らかの形で学習者が参加できるオンライン学習プラットフォームを提供することは必要であると考えられる。ただし、オンライン学習プラットフォーム上に学習項目をただ並べるだけでは意味がない。한·김(2013)はモバイル機器を用いた学習が学習者に肯定的に認識されてはいるものの、実際の利用率は低いと述べ、学習者がどのようなことを望んでいるのかを調べた。その学習者の答えの中で興味を引くのは、学習者が「知らないことについて質問できること」を望んでいたことである。質問を含め、学習者自らが意見を発信できるような形で、提示されている情報と学習者との間に何らかの関係性を築くことができなければ、提示されている情報は学習者にはただのディスプレイに写った文字の羅列にしか見えないかも知れない。本調査と関連づけてみると、オンライン学習プラットフォーム上に授業に対する質問や意見を述べる場を提供すれば、同じ授業を受けている学習者同士の情報共有と学習に対する理解を深めることに役立つと思われる。以上の点を考慮した上で、学習者の要求はあったが授業で扱いきれなかった内容や学習者が苦手と感じていた音声運用と関連する内容を中心に学習項目を選定するなど、オンライン学習プラットフォーム上に掲示するコンテンツを開発する必要がある。

#### 4. おわりに

本稿では、日本の大学で韓国語を学んでいる学習者を対象に、授業改善に向けて知見を得ることを目的として韓国語学習に対する学習者の意識の実態について検討した。

まず、韓国・韓国人に対する学習者の関心事や韓国・韓国人がどのようなイメージとして学習者に理解されているのかを調査した。その結果、韓国・韓国人に対して49.5%の学習者が「関心がある」と答えており、関心事の大半は韓流関連のものであった。2000年代以降に広まった韓流ブームはその勢いを弱めているものの、依然として学習者の関心を引くコンテンツになっているのである。韓国・韓国人に対するイメージは、直接観察可能でマスメディアを通じて接しやすい要素によって形成されていることを確認したが、肯定的なイメージと否定的なイメージが混在している例が多数見られた。学習者には韓国・韓国人に対する先入観や偏見を解消するために、様々な視点から学んでいくことの重要性を理解させる必要があると考えられる。

さらに、韓国語学習に対する学習者の意識の実態を調べた結果では以下のような特徴が見られた。韓国語を選んだ理由については、「外国語の中で一番使えそうだから」と答えた学習者が最も多く、実利的な側面を重視している傾向が見られた。また、韓国語の学習到達目標については、韓国語能力試験の1級程度の能力を身につけることで満足するとの声が多数を占めていた。将来への活用については、多くの学習者が「旅行」と答えていた。これらの結果より、学習者は韓国語学習において専門性よりは意思疎通中心の基礎的な言語の運用能力を身につけることに価値を置いていることが見受けられる。学習で難しいこ

とを問う質問では、学習者が特に音声運用に困難を感じていることを確認した。授業で足りないと感じている点については、実用性が足りないという趣旨の答えが多数寄せられた。授業とその予習・復習以外に韓国・韓国語を学ぶ機会があればどのような内容を学びたいのかという質問に対しては、文化体験を望む声の多さが目立ったのが特徴的であった。単位取得後の韓国語学習継続の有無については、42.9%の学習者が継続を希望していた。

本調査で明らかになった点を踏まえ、授業改善のためには既存の授業形態に加え、オンライン学習プラットフォームを開発する必要があることを提案した。オンライン学習プラットフォームの開発は今後の課題としたい。

## 参考文献

- 오고시 나오키 (2015) 「일본 대학의 한국어교육과 한국어 교육과정」 『국제한국어교육학회 제 25 차 국제학술대회 논문집』 325-330.
- 오기노 신사쿠 (2015) 「일본 대학 내 교양으로서의 한국어교육 발전 방향 연구 - 국립 시즈오카대학의 한국어 학습자의 요구분석 결과를 중심으로 -」 『국제한국어교육학회 제 25 차 국제학술대회 논문집』 66-77.
- 타니자키 미쯔코 (2012) 「일본 대학교 한국어 문화교육의 현황과 과제 - 제 2 외국어교육으로서의 한국어교육을 중심으로 -」 『언어사실과 관점』 30, 209-230.
- 한상미·김종인 (2013) 「모바일러닝 (Mobile Learning) 에 관한 한국어 학습자 의식 조사 연구」 『외국어로서의 한국어교육』 39, 407-445.
- 大岩昌子 (2008) 「フランス語学習者が学習意欲を失う要因を探る - 習熟度別考察 -」 『名古屋外国語大学外国語学部紀要』 34, 91-103.
- 宮地功 (編) (2009) 『eラーニングからブレンディッドラーニングへ』 共立出版.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11(4), 227-268.